唐木順三全集

第十三卷

筑摩書房版

唐木順三全集第十三巻
昭和五十七年 四月三十日初版第一刷發行

著者 唐木順三
發行者 布川角左衛門
發行所 筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番號 一〇一—九一
電話 東京(291)七六五一(營業)
東京(294)六七一一(編集)
振替 東京 六—四一二三
印刷 株式會社精興社
製本 鈴木製本株式會社

Printed in Japan 0395—74513—4604

乱丁・落丁本の場合は，ご面倒ですが，小社読者係あてにご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目　次

古代史試論

第一部

仁德記……三
仁德陵と古事記……一〇
飛鳥寺……四八
馬子と聖德太子……七七
天武・持統記……二四

第二部

古事記における「いつはる」「あざむく」の問題……一四五
古事記における演劇性と抒情性の問題……一五九
富士谷御杖の「言靈」……一八〇
言靈と言擧……一九三
あとがき……二〇九

良寛

一　生涯懶立身――良寛の生涯と境涯――……二一三
「生涯、身を立つるに懶し」　良寛出家の理由　「懶」の由來
「人間の是非は一夢の中」　「騰々、天眞に任す」　圓通寺での
修行　諸國行脚　「天眞」　父・以南のこと　騰々、優游、
蕭灑　「雙脚、等閒に伸す」　良寛像　沙門良寛の屈折の跡
時代の狀況　閉塞の時代　龜田鵬齋　良寛と鵬齋　文人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

墨客と沙門　良寛壯年時の「衝天の志氣」　良寛の自嘲
「讀永平錄」　良寛と道元

二　「捨てる」と「任す」……二九〇
捨聖一遍の場合　信と任　遊行　道元における捨と離と任
「髮を剃り、また髮を剃る」　道元における轉　良寛の「天眞に任す」

三　良寛の資性……三三
人生無常・世間無常　出家入道　禪における資性の問題
「我が性、逸興多し」　「愚の如く、痴の如し」　天眞爛漫

四　良寛における詩……三三
「我詩は詩に非ず」　「心中の物を寫す」　「祇這是（たたこれこれ）」　行キテハ到ル水窮マル處　坐シテハ看ル雲起ルノ時　禪における視覺型と聽覺型　良寛の「不繫の舟」

五　良寛の「戒語」と「愛語」……三四
禪における言語表現の問題　良寛において言葉のもつ意味

「戒語」九十ケ條　「くさき」と「めきたる」　言葉と存在とのつながり　言葉と沈默　「言葉をしみじみといふべし」「愛語」　言葉の布施　「道ふ」「道得」　「而今の山水は古佛の道現成なり」

六　良寛における「聞く」……三六七

耳聾漢　眼と耳　良寛の音樂性、リズミカル　「唯聞ク落葉ノ頻リナルヲ」　見とめ・聞とめの問題　芭蕉と蕪村　良寛の「遍舟の興」

七　良寛における歌と書……三八四

山かげの岩間をつたふ苔水の、の「の」　漢詩の「只聞く」と和歌の抒情の相違　「形見とて」の歌　「むらぎもの心は和ぎぬ」の歌　齋藤茂吉の良寛評　「いざうたへ」の歌　良寛における遊び　優游　貞心尼のこと　「あひたきものを」の歌　良寛と萬葉集　枕詞の多用　響き　良寛の書の音樂性　漱石と良寛

あとがき……四二五

禪と歴史……四三一
大燈の氣宇・一休の風狂……四六七
後記……四八三

古代史試論

第一部

仁德記

應神天皇には二十六人の御子があつた。男十一人、女十五人。或ひは男十二人ともいふ。娶つた姫または郎女は知られてゐるだけで十人。品陀眞若王の娘三人を后として併せて十二人の御子をもつたが、一の姫の腹に大山守命、二の姫の腹に大雀命があつた。また丸邇之比布禮能意富美の娘、宮主矢河枝比賣から、宇遲能和紀郎子、八田若郎女、女鳥王の三人が生れた。更に櫻井の田部の連の祖、島垂根の娘、絲井比賣から速總別命が生れた。

次代の皇位を繼ぐべき候補は大山守命と大雀命と宇遲能和紀郎子の三人であつたが、父王はいちばん年少の宇遲能和紀郎子をことの外に寵愛してゐた。ある日、天皇は大山守と大雀の二人の御子を招いて、年長の者と年少の者と、いづれが可愛いと思ふかと問うた。單純で無遠慮な問ひではあるが、この問ひには皇位繼承といふ重いものが懸つてゐる。大山守は當然のこととして、「年長の者」と答へた。太子に立つべきは自分の外にないとい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ふ心づもりである。大雀は父王の心情を察して、年長の者は既に一本立ちをしてゐるのだから心にかかることは無い、可愛いといふことからいへば幼き者こそ、と答へた。天皇には思ふ壺の答へではあつたが、それをもとにして下した天皇の詔とは論理の上では合はない。天津日繼は宇遲能和紀郎子と決められ、大山守は山と海を治めよ、大雀は天下の政を執つて天子を補佐せよ、といふのが大詔であつた。天皇から年長と年少と「いづれか愛しき」と聞かれたので、幼い者が可愛いといふ答へが出たのだが、愛しき、といふことと立太子とは必ずしも一致しない。然しそれがまた古物語の論理といへば論理であつた。

大山守は内心おだやかでない。わが生みの母は天皇の第一の后である。母は品陀眞若王の娘で歴とした家系である。宇遲能和紀郎子風情とはわけが違ふ。なるほど宇遲の母はみめかたちひとにすぐれた方には違ひないが、天皇が近江へ行幸なされた折、宇治の木幡の村でゆきずりに會はれ、その妖美に心迷はれて契を結んだといふ因縁にすぎない。和紀郎子、その妹の八田若郎女、女鳥王、ともどもに器量よしで賢しいには賢しいが、自分とは家柄血統が違ふ、さういふたまりにたまつた不滿が天皇崩御を機に爆發した。ひそかに兵を集めて太子宇遲を殺さうと謀つた。中の兄の大雀は上の兄の行動を見てとつて、弟の太子宇遲に事の急をつげた。太子は謀り事をもつて大山守を宇治川に沈めた。

宇遲と大雀は三年もの間、互に皇位を讓り合つた。大雀は先帝の詔によつて當然に、弟ながら宇遲が皇位を繼ぐべきだと主張し、弟は大雀こそ人德智謀衆にすぐれてゐる故、詔はさることながら、まさに皇位に登るべきであると主張して讓らなかつた。然し宇遲の意外の早世によつて大雀が皇位に登つた。卽ち仁德天皇である。

大雀の大后は葛城曾都毘古の娘、石之比賣で、音に聞えたやきもちやきであつた。奉仕の女官も天皇の近くに侍ることを遠慮した。たまさかに宮中に入る女官をみただけで嫉妬のほどをかくすことなく、ぢだんだふんで怒り狂ふほどであつた。大后の嫉妬にゐたたまれず、天皇の御側を離れた女たちも二三あつた。

大后はまたいはゆる豐樂が好きで、折にふれて大宴會を主催したが、あるときその宴會用の御綱柏を採りに紀の國に行かれた留守を幸ひに、天皇は八田若郎女と婚ひなさつた。八田の姫はかつて皇位を讓りあつた宇遲能和紀郎子の妹で、卽ち天皇の庶妹に當る。大后は紀の國からの歸途、右のことを聞いて例の嫉妬のほむらに燒かれ、天皇のゐられる難波の高津の宮を避けて、淀川を遡つて山城に入られ、更に奈良を過ぎて父の國、葛城へ入つてしまはれ、なかなか天皇の御所にお歸りにならなかつた。天皇はあれやこれやと辯解もし、みづから迎へに行かれて、漸くにして大后の御機嫌を直すことができたが、このかたくなながら實力のあつた大后とくらべて、八田の姫が優にやさしく、楚々とした方であつたことは、天皇との左の應答歌によつても知られる。

八田の　一本菅は　子持たず　立ちか荒れなむ　あたら菅原　言をこそ　菅原と言はめ　あたら淸し女

因にいへば八田の姫には子が無かつた。その歌、

八田の　一本菅は　獨り居りとも　大君し　よしと聞さば　獨り居りとも

八田の姫の同腹に女鳥王といふ美しい妹がゐた。美しさは姉に劣らないが、姉と違つて氣性は强い。天皇が大后を恐れて、姉に思ひを抱きながらとかく疎遠になるのをその眼でみて、天皇をこころよくは思つてゐなかつた。また天皇にそのやうにあしらはれながら、一本菅を守つてゐる姉をはがゆく思つてゐた。その女鳥王のところへ、

天皇からの使が立つた。使として派遣されたのは速總別命。先帝と絲井比賣との間に生れた王子で、天皇とは異腹ながら兄弟である。女鳥王とも異腹の兄妹である。勅使の速總別に女鳥王は次のやうに答へた。

「大后の氣性があまりにはげしく、かたくななので、姉の八田の姫も御存知のやうな仕打をうけてをりまする。であります故、私は宮中へ參るのは嫌でございます。」

ここまではまづ尋常の度を越してはゐない。だが女鳥は速總をみつめたまま、ひといきに「いつそ私はあなたの妻になりたい」と言ひ、その場で婚ひに及んだ。

かうなつてしまつたのでは、勅使は復奏のできる次第ではない。荏苒日を消してゐる間に、天皇は様子を見ようとして御自身で直々に女鳥王の館にでかけられた。折しも女鳥は機の梭を動かしてゐた。その機織りの音を聞いて、天皇は敷居に立つたまま申された。

女鳥の　我が王の　織ろす機　誰が料ろかも

王女は機に坐つたまま、梭ををさめて答へられた。

高行くや　速總別の　御襲料

天皇はわが名の大雀とくらべて、速總、隼を、高行くやとかけて歌つた女鳥の心に、多少の皮肉を感じはしたが、あつぱれ、と思ふところもあつて、そのまま宮へ歸られた。髪の黑々とゆたかの故に黑比賣とよばれてゐた吉備の國の海部直の娘、可愛く若やいだあの姫が、大后の狂はんばかりの嫉妬におそれをなして鄕國へ逃げ歸つた、あの苦い記憶を、天皇は歸りながら思ひ出してゐた。八田の姫に心ならずもつれなく對する自身のはがゆ

さが、ちらりと頭の中をかすめてもゐた。

女鳥は女鳥ではつきりと、ためらふことなく心の中を示したが、あれもまたその行き方と大雀命は一方では思つてゐた。それといふのも、御自身がまだ若かつた日の、ある出來事がゆくりなくも浮んできて、微笑とも苦笑ともつかないものが顏に出たことに心づいたからである。

日向の國の牛諸といふ豪族の女、名は髮長比賣、その評判は九州から歸つた使者によつて時の天皇應神の耳に達した。顏色はうすくれなゐ、その名の示すやうに丈なす髮をして、體軀も堂々として胸はこよなく豐かであるといふ。天皇は船を出して姫を難波津に迎へた。その接待に當つたのが大雀命であつたが、若い大雀は船から上るその美しい姿をみて胸ときめき、己れのものにしたいと思つた。然し直接に父王に言ふ術をもたない。長老の大臣建内宿禰のところに走つて衷情を訴へた。宿禰のとりなしよろしくあつて、天皇は祝宴までひらき、群臣のあつまつた中で髮長比賣に盃をさづけ、大雀の妻たることを證した。酒の廻つたとき天皇は、大雀に、お前もぬけめのないやつ、朕の知らないうちに、手まはしよく、堰杙を打ちをつて、比賣の心をせきとめてしまつたわい。いやはやどうも、隅におけない御子ぢや、と笑つてからかはれた。比賣と共寢をした朝、口にうかんだ征壓歡喜の歌を、いまにいたるも大雀は忘れてはゐない。

道の後　古波陀嬢子は　爭はず　寢しくをしぞも　愛しみ思ふ

おのが知らぬ間に、女鳥王と馴染んだ速總別を、なかなかの者と思つて微苦の笑ひをうかべたのは、右のやうな己れの若き日の思ひ出がよみがへつてきたからであつた。

然し、今度の場合は結果が惡かつた。大雀は髮長比賣との間に男女一人づつの御子をもち、嫉妬深い大后との間もどうやら惡くはない。だが女鳥は、道の後といはれてゐるやうな日向の國の朴訥の出ではない。若し若死しなければ、仁德に代つて皇位に登つたかもしれない宇遲能和紀郎子の妹である。姉の八田の姫は、後宮に入つてはゐるが、ひかげ者扱ひを受けてゐる。大雀何ものぞと思ふ心がかねてからあつた。大雀から誰がための機織りと問はれて「高行くや　速總別の」と口をついてでたのも、さういふかねての思ひの發散であつたらう。

女鳥はいまはわが夫となつた速總別が訪れてきたとき、胸の內を歌にして訴へた。

雲雀は　天に翔る　高行くや　速總別　鷦鷯取らさね

ひばりのやうな小さい鳥でも、自由に天空を翔け、自在におのが歌をうたふ。ましてその名に負ふ隼、大といつても所詮鷦鷯の如き弱き鳥何ものぞ、といふのである。鷦鷯、音はセウレウ。ささき、またの名はみそささい。雀に似てさらに一層小さいが敏捷の鳥である。

さてそのささきのことだが、次のやうな傳へがある。仁德天皇のお生れになつた日に、木菟鳥が御產の部屋に飛びこんできた。不思議のことと思つた父の應神が建內宿禰を招いて、木菟產室に入るは何の兆ぞと聞かれたところ、まさしく吉兆との答へとともに、實は、とつけくはへて申上げた。實は私のところにも昨日お產があつたが、折しも鷦鷯が產室に飛びこんで參つた。それを思ひかれを思ふにつけても、まことに不思議と申せば不思議のことにござりまする。それをお聞きになつた應神は、なんと思はれたか、ひとつ木菟と鷦鷯とを交換して、各〻の子の名にしようではないか。そちの子の名はつく、われの子はささき、ささきとつくと將來互に仲好く助け合ふやうに。大雀の名はそこに由來するといふのだが、上つ世の傳へはそれをそれとして受取るのが、かむながら

といふもの、さかしらだてはすべきではない。因みにいへば、仁德の大后石之比賣の父、葛城の曾都毘古は建內宿禰の子といふことになつてゐる。

さて、隼よ、鷦鷯を取れと、女鳥が歌つたといふことをもれ聞かれて、仁德天皇は直ちに兵を集めた。速總別と女鳥はいちはやく逃げて、大和の國の十市の郡にある倉椅山に辿りついて、ひといきついた。そのときの速總別の歌、

梯立の　倉椅山を　嶮しみと　岩かきかねて　我が手取らすも

また

梯立の　倉椅山は　嶮しけど　妹と登れば　嶮しくもあらず

二人は追手を受けてそこから更に蘇邇の谷に落ちのびたが、遂にそこで最期を遂げた。

追手の將の名は山部大楯連、女鳥王のからだのまだぬくもりを失はないうちに、玉をちりばめた腕輪をもぎとつて持ち歸り、おのが妻に與へた。やがて宮中に天下の安泰を祝ふ大宴會が催された折、大楯の妻はくだんの腕輪をつけて參內した。大后は氏々の女たちにそれぞれ盃をとらして酒をついだが、ふとみると大楯の妻が見覺えのある玉で腕を飾つてゐる。これはまがひもなく音に聞えた女鳥のもちもの、大楯の細君風情の無骨な腕にまかるべきものではない。その夫の連が直ちに召喚され、死刑を申し渡された。速總と女鳥は謀叛を企てたればこそ誅した。だがこの二人はともに應神の子、臣下が君主の屍を遇する道にそむき、女鳥の腕から玉の釧をもぎと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com